

# 薩摩焼古典柄原図の図形化と用途展開

山田 淳人\*, 澤崎 ひとみ\*\*

## Illustrating Form and Variety Development of Classical Drawing on Satsuma Potteries

Atsuhito YAMADA and Hitomi SAWASAKI

薩摩焼は白薩摩と黒薩摩に大別でき、白薩摩は、貫入と呼ばれる細かいヒビが入った淡い象牙色の素地に、華やかで繊細な絵付などが施されたもので、鹿児島を代表する伝統的工芸品と言える。本研究では、絵付けのもととなる当センター所蔵の「大迫政次郎筆 白薩摩焼上絵図録」をデジタル化し、上絵を構成するパーツごとに分類、分割し、新しい上絵を作成し、県内の工芸素材を対象に用途展開を試みた。

**Keyword** : 薩摩焼, 上絵, 用途展開

### 1. 緒 言

薩摩焼は、白薩摩と黒薩摩に大別できる。白薩摩は、貫入と呼ばれる細かいヒビが入った淡い象牙色の素地に、華やかな絵付が施されたもので、主に藩主御用達向けのものである。対して黒薩摩は、鉄分の多い火山性の土などを用い、力強く重厚で、庶民の日用雑器を中心として焼かれたもので、どちらも鹿児島に根ざした伝統的工芸品である。

白薩摩の特長の一つに華やかな絵付けがあげられ、現在でも根強い人気を持ち、花瓶や壺などの大きなものから、湯飲みなどの小物まで、多種多彩な商品が作り続けられている。

絵付けは、同じ絵柄を書いても窯元によりタッチが違うなどそれぞれ個性がある。絵付けは、職人の個性でフリーハンドで描かれるものがほとんどであるが、絵付けのもととなる「原図」と呼ばれるものをもとに描かれているものもある。原図は本来、窯元独自のもので、窯元にて管理されており、門外不出のものである。

当センターでは、「大迫政次郎筆 白薩摩焼上絵図録」(以下図録)を所有している。工業試験場から代々受け継がれてきたものであり、製作年月日等は不明であり、利用や活用はされていない。図録は大変古いものであることは推測でき、保存状態はよかったが経年劣化もあり、できるだけ早期に保存を図るとともに図録の資産価値を利用した工芸的活用に取り組むことにした。

### 2. 図録とその保存

大迫政次郎(1881～1961)氏は、当センターの前身である工業試験場時代に薩摩焼の研修生を対象とした白薩摩の絵付けの指導者で、薩摩焼年表にも記述がある近代絵付

師の一人である。図1に示す。大迫政次郎氏によって描かれた原図は、129枚現存する。図2にその外装と図録の一部を示す。それぞれ、通し番号が書かれているが、欠落しているものもある。絵の種類は、割文様と言われる幾何学紋様だけを一枚に集積したものから、武者絵風のものまで多種多様に渡っている。保存に当たっては、原寸大で出力したときに、筆のタッチや微妙な色合いのぼけ具合やかすれ具合が表現できる解像度の300dpiとした。保存方式は、JPEG(Joint Photographic Experts Group)とした。また、図録を容易に閲覧できるようPDF(Portable Document Format)のデータも作成を行った。シミ等があるものも見受けられ、デジタル処理にて復元も試みたが、図録本来の特徴を活かすため敢えて手を施さず、現状の保存ということに重きを置いた。



図1 大迫政次郎氏

\*デザイン・工芸部

\*\*デザイン・工芸部(現 素材開発部)



図2 筆書きされた箱(上)とその図録(下)

129枚の図録は、割文から植物、動物、武者絵など多岐に渡って構成されている。デジタル化したものは、そのままの利用も可能であるが、新たな用途展開を目的として加工が容易に出来るよう絵を構成する大まかなパーツごとに分割を行った。鳳凰は空想上の動物として扱い、具象文様が172点、割文様が273点となった。分類した構成を図3に示す。パーツによっては分類不能なものもあり、分類は1次的な仮のものとし、利用頻度等によっては独立させるなど使いやすいものへ変更する余地も検討している。

### 3. 具象文様を利用した用途展開の事例

具象文様は、植物を対象にしたものが最も多く、壺や花器など比較的大きい焼物の素地を対象にした絵柄が多く見受けられた。動物文様では、雉、金鶏、孔雀など古典的な柄が多く、書かれていた時代性を感じることが出来る。

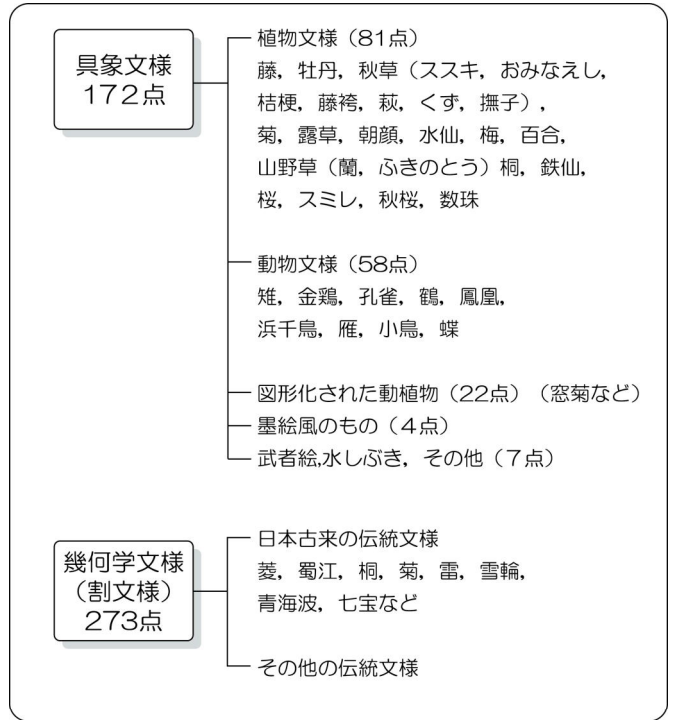


図3 分類した部品の構成

### 3. 1 白薩摩(ぐい呑み, ビアグラス)への展開

具象文様の用途展開は、ペイント系ソフト (adobe 社製 Photoshop) で行った。具象文様の中から「窓菊」と呼ばれる花柄や植物柄の文様を円形状にレイアウトしたものを図録パーツから選択し、ぐい呑みに展開した。図4に示す。



図4 「窓菊」のぐい呑みへの展開事例

本来は、複数で壺などに展開される柄であるが、絵柄単体でも比較的小さいぐい呑みに、違和感なく展開することができる。

ビアグラスへは、孔雀や秋草を展開した。図5に示す。図柄によっては反転を施したり、複数個合わせるなどパーツ化したメリットを最大限利用した。縦長の素地を活かせるように、比較的大柄の図柄を利用した。



図5 ビアグラスへの展開事例

### 3. 2 実際の商品への展開（花器）

絵付け窯元に依頼をし、シミュレーション画像をもとにして実際の花器に絵付けを行った。図6にコンピュータで作成した原図を示す。



図6 図録パーツを利用したシミュレーション画像

実際に絵付けを施すまで、シミュレーション画像をもとに職人とメール等で、金彩や割文様の大きさやレイアウトなど細部にわたって検討が出来た。また、第三者にシミュレーション画像を見てもらうことで、客観的な評価のもとに製作を進めることが出来た。これまでは職人によるイメージ図の提案で製作にしていたものが、より具体化されたシミュレーション画像をもとに協議を行うことで、イメージの相違が無く、絵付けの位置や大きさも様々なシミュレーションが出来ることで、製作の自由度が広がり完成度の高いものにできた。と絵付師の声ももらい、現場レベルでの原図並びに図録パーツの有効性を確認でき、完成度の高い商品への可能性を確信できた。図7に実際に出来上がった花瓶を示す。



図7 シミュレーション画像の絵付けを施した花器

### 3. 3 木製品への展開（屋久杉製壺）

図録の絵柄は、比較的大きい素地を対象としており、植物柄の牡丹は特に豪華な印象を与える。屋久杉製の壺に牡丹のパーツを利用し彫刻を施した。使用した牡丹パーツを図8、彫刻を施した屋久杉製の壺を図9に示す。



図8 植物単体パーツより牡丹の画像



図9 彫刻を施した屋久杉製の壺

屋久杉製の壺はその年輪の細かさや独特な色合い、ボリウムで屋久杉の存在感を演出するものであるが、細やかな彫刻を施すことで、さらに豪華さが加わった。展示会等に出展したところ入場者の関心を集めた。

#### 4. 割文様を利用した用途展開の事例

割文様は、白薩摩の口、首、底と呼ばれる部分に施されている。図録に収められている文様の多くは、日本古来の吉兆文様などをベースに構成されているものであった。

また、割文様は、陶芸業界から割文様単独での図録集が欲しいとの声を受け、図録から割文様だけを抽出して割文様集として別途まとめた。図 10 に割文様の抜粋したものの一部を示す。図録から薩摩焼独特の模様を抽出することも試みたが、判別が難しく見つけられなかった。



図 10 割文様の抜粋の一部

##### 4. 1 白薩摩への展開（ぐい呑み）

割文様は、図録のままのデータを実際の商品に展開することは現実的でないため、ベクター系ソフト (Adobe 社製 Illustrator) にて再度図形化した後、用途展開を行った。コンピュータ上で作成したものをシール状のシートへ出力を行い、カットし、素地へ貼り付ける方法で、展開の検討を行った。割文様のカラーリングや縦横の比率、レイアウトを変えることで、現在の薩摩焼には見られない現代的な

文様となる。展開した図柄は「菊」文様であるが、カラーリングは、季節感を感じられるものにした。図 11 に示す。実際の商品への展開は出来なかったが、今後機会を見て、割文様を利用した商品の展開を検討していきたい。



図 11 割文様のぐい呑みへの展開

##### 4. 2 木製品への展開（コースター、ランチョンマット、竹炭ボード屏風）

割文様を利用して、木製品への展開を行った。連続させたり、部分的に拡大するなど、具象文様に比べると展開した際の自由度が比較的高いと思われる。

本研究では、主にレーザ加工機を利用して地元企業と協力し試作提案を行った。展開した図柄は「菊」「青海波」「七宝」などである。試作事例を図 12 から図 14 に示す。

試作品自体の商品化には至らなかったが、一部の試作品は、試作をきっかけとして関連商品を製作し、2008 年 12 月の新特産品コンクールの工芸品部門で入賞することが出来た。今後、企業からの図柄を付加する等の商品開発時には積極的な活用を図っていきたい。



図 12 コースターへの展開

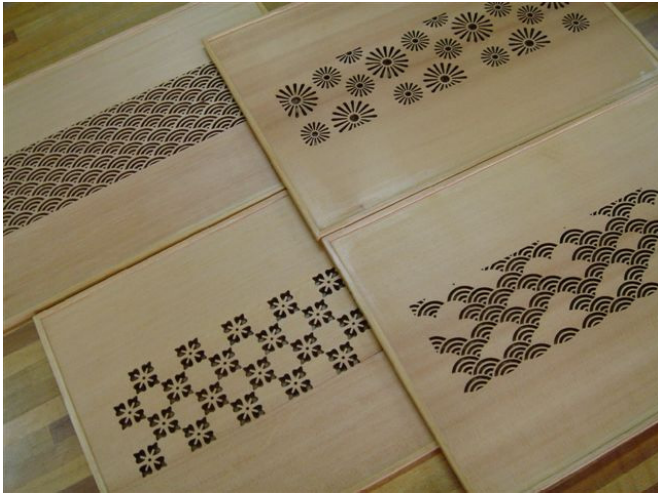


図 13 木製ランチョンマット



図 14 竹炭ボード屏風

#### 4. 3 パッケージデザインへの展開

鹿児島は豊かな海産資源にも恵まれており、これらを活かした2次加工製品も多く生産されている。地元漁協婦人部のナルトビエイの加工品のパッケージに関する相談を受けた。水産加工品ということで、「青海波」を利用し、ラベルの一部にその柄を展開した。図 15 に示す。



図 15 水産加工品への展開

#### 5. 蓄積されたデジタルデータ

本研究で蓄積された図録データは、広く普及させる観点から、図録データ集としての配布もしくはWEBでダウンロ

ードできるなどの方策を取ることを検討した。しかしながら図録は本来、薩摩焼の上絵用としてまとめられたものであり、工芸的ではない活用を目的とする場合、書かれた大迫政次郎氏の本意ではないであろうという判断のもと親族の方と協議し、図録データは、親族並びに鹿児島県陶業協同組合、センターの3者にて責任をもって保存し、利活用に努めるという形を取った。図録データの閲覧は可能であるが、データの複製や譲渡は行っていない。その都度、必要な箇所のみを出力して対応している。配布方法に関しては、今後も検討を行っていきたい。各種イベントでは、図録データの利用、活用のPRを積極的に行っている。図 16、図 17 は、薩摩焼フェスタ 2008、かごしまデザインコンペ 2009 における展示風景である。



図 16 薩摩焼フェスタ 2008 における展示

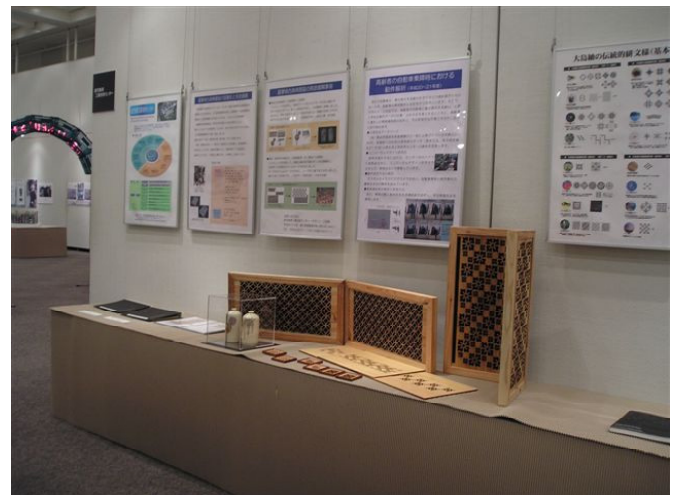


図 17 かごしまデザインコンペ 2009 における展示

図録の公開は窯元関係者だけでなく、一般の来場者にも白薩摩の上絵付けの繊細さをアピールすることができ、興味を持っていただいた。陶業協同組合では既に図録の活用が始まっており、窯元の新しい絵付けのイメージ創出や後継者育成のための資料として役立っている。陶業組合に配

布した資料を図 18 に示す。今後は、図録データが商品にどのように転用、活用されたか、追跡調査をしていきたい。



図 18 配布した図録集と割文様集, 図録データディスク

## 6. 結 言

本研究を通し、図録の持つ多様性を県内伝統的工芸産業などに展開することで、図録の持つ可能性を確認すること

が出来た。同時に白薩摩における絵付の新たな展開の可能性を見いだすことが出来た。今後は、図録データをベースに県内の薩摩焼窯元だけでなく、他の製造企業にも働きかけ、企業の商品イメージと合致するのであれば商品開発をする際の一助となるようにしていきたい。また、製造業者自身が図録データを積極的に活用するものづくりの機会となるような試みもしていきたい。

## 謝 辞

研究を進めるに当たり、鹿児島県陶業協同組合理事長、西郷隆文氏の取り計らいにより、大迫政次郎氏の孫にあたる大迫政彦氏と面会することが出来ました。また大迫政彦氏の多大なる協力により、図録を媒体として様々な活用を試みることが出来ました。謝意を表します。

また、試作製作にあたっては、絵付工房秋月窯の西田秋雄氏（花瓶の絵付）、(株)山王産業の山王博和氏（屋久杉壺への彫刻）、蔵前宮殿製作所の蔵前矢須夫氏（コースター、ランチョンマット等）や(株)大和木材の吉崎和穂氏（竹炭ボード屏風）に協力をいただきました。